

アメリカ言語学の歩み : その背景と方向

林, 哲郎
九州大学教養部 : 助教授

<https://doi.org/10.15017/6796100>

出版情報 : 言語科学. 2, pp.29-36, 1966-03-05. 九州大学教養部言語研究会
バージョン :
権利関係 :



アメリカ言語学の歩み

—その背景と方向—

林 哲 郎

I

アメリカにおける言語研究は、その理論的な根拠を提供しているアメリカの一般言語学と、その厳密な共時論的分析方法をうちたてている記述言語学とによって代表されているとみてよい。サピアの「言語」（1921）と「言語における音声の型」（1925）の論文、およびブルームフィールドの「言語」（1933）とは、たしかにアメリカの記述的方法にもとづく構造主義的言語学の基礎をすえ、その発達の方角を決定するものであった。この構造言語学の発達の意義を知るためには、その背景を19世紀における近代言語学の進歩のなかに見さ定める必要があろう。そしてそのことから、20世紀30年代以後のアメリカ言語学の発達を展望し、ことに新しい研究分野である数学的言語学の発生の意義を考えるのが適当であろう。

II

欧州における近代言語学は、ジョーンズ卿が1786年にサンスクリットがギリシャ語とラテン語に「強い親近性」を有していることを発見したことにはじまるとされる。¹⁾ もちろんジョーンズ以前の学者もこの現象には気づいていたにしても、ジョーンズは単なる直観にたよらず、それぞれの言語の具体的な資料にもとづいてこの推論をたてたのである。この三種の言語が「ある共通の起源から発生した」と考えざるを得ないという洞察は、その後の印欧諸語の研究を真に科学的基盤に置いた。このようにして1816年ドイツの言語学者ボップは、サンスクリットの活用体系をギリシャ語、ラテン語、ペルシア語、ゲルマン祖語と比較し、1818年デンマークのラスクは、古代アイスランド語の起源をしらべ、これとほかのゲルマン諸語との親近性を論じた。そしてついにグリムは「ドイツ語文法」（1819, 1822）において、ゲルマン語と古典語とのあいだに存する子音推移の法則を明らかにした。²⁾ これらの学者は、ギリシャ以来の思索と推理による哲学的な思弁にすぎなかった認識論的な言語学を、真に実証的な史的方法による言語研究へとみちびいた。それは印欧諸言語間に存する親族的発生の関係をさぐり、言語の起源の形態をつきとめていわゆる祖語を再建するという意図を有していたのである。

したがってこの時期の言語学者の言語観は、「言語は変化する」ということ、換言すれば

「言語には歴史がある」という見解に要約することができる。³⁾ 言語の起源や発生や発達の問題は、「歴史的」ないしは「比較的」観点から取扱われねばならないという、文献に残された古い言語についての方法論の確立を意味した。このような見解は、当時まで歴史といえは戦争や王朝の歴史に限定してのみ考えられていたのにたいして、文化伝達的手段であり人間活動の基礎をなす言語そのものにも適用されたことを物語るものであろう。

印欧諸言語の史的比較的研究は、欧州のそれぞれの国語の辞書編集にも影響を及ぼしたことは注目してよい。その典型的な例はグリム兄弟により「ドイツ語辞典」が1837年に着手され、その第Ⅰ巻が1854年に出版されたこと、「オクスフォード英語辞典」が1858年に編集計画が立てられ、1884年にA項の部を出版しはじめたことである。これら二大歴史的辞書はそれぞれの言語のすべての語彙を収録し、古い時期からの文献例を示し、語原の解説には前述の比較言語学の研究成果を利用したのであった。しかしイタリアのクルスカ・アカデミー辞典（1612）とフランス・アカデミー辞典（1694）以来、欧州各国のアカデミーはそれぞれの国語を純化し洗練し、ことにイタリアでは第14世紀のダンテやペトラルカやボッカチオの用いた言語を、フランスでは17世紀の言語をもっとも優れたものと見なし、これをしてできるだけ「固定」させようと考えた。そして言語の変化は、かれらアカデミーの会員たちにとっては墮落であり卑俗化であり、これを監視し防止するのがアカデミーの機能の一つと見なした。英国においても、ジョンソンははじめ英語の純粋性の保持とその固定化が必要であると考えていたが、後の英語辞典の序文（1755）では、言語の変化の不可避的である事実を認めざるを得なかった。このような第17・18世紀における言語の純粋性保持と言語固定化の観念は、19世紀には誤った言語観として放棄されたのである。

Ⅲ

1875年ヴェルネルの「第一子音推移の例」⁴⁾という論文は、近代言語学の第二の時期を開始するものとして意義がある。かれはそのなかで言語変化について「規則のない例外はない」という表現をしたが、翌1876年レスキンによって「音韻法則に例外はない」⁵⁾という有名な句が示され、言語変化は偶然的なものではなく、恒久的な一定の条件にしたがうことを論証した。また特異な音韻変化に対しては類推と借用の原理がはたらく事実も明らかにされた。これらいわゆる青年文法家たちの基本的な考え方は、方法論的に厳正であることと、直接観察できる現代の言語を資料として、その本質を見さため、その内的機能を重視する点にあった。このような態度は、従来の祖語の再建ということを目的として主として文献に残された死語や古い時期の言語に着目し、実際の音声よりも書かれた文字にとらわれていた研究から

の大きな進歩であった。

この時期のもっとも重要な主張は、パウルの「言語はことばである」という見方であった。「いかなる言語学者も書かれたものは言語それ自体ではないということ、また書記法に移されたことばは、これを取扱うまえにつねにことばにもどさねばならない、ということを見無視すべきではない」。⁶⁾ このような言語にたいする認識は、書きのこされた文献の研究——その權威や起源や年代や意味を決定しようとする「文献学」(philology)と、現在話されている観察可能なことばの研究である「言語学」(linguistics)との区別にたいする認識でもあった。またパウルの「厳密に言えば、個人の数とおなじだけ多くの言語を区別しなければならない」⁷⁾ という立言は、18世紀において言語に一定の標準的なもののみを認めて、廢語や卑語や古語や隠語を排斥しようとする考え方からの脱却を示すものであった。かれは「言語は変化に富む」という言語現象の事実を明確にとらえていたのである。

19世紀末の言語研究を特色づけるのは、パウルの暗示した方向の一つである、言語音の科学的研究であった。つまりそれぞれの言語の音声を、単に文字からの推定や直観にたよらず、生理的物理的観点からおこのう真に科学的な研究のはじまりであり、ベル(1867)やスィート(1877)やジーヴェルス(1881)等によって開發された。そしてこのころ、現代の音韻論の先駆的見解も現われた。それはクルッネーの弟子でポーランド人クルシェフスキの論文「音声交替について」⁸⁾ (1881)であった。この前者の交替型のなかに、「異音」や「条件変異音」や「相補分布」等現代音韻論の中心的考えの萌芽がすでに見られる。

一方、言語地理学は発音、語形、語彙、構文などの言語的事象の地理的分布を調査するが、このような研究の起った動機の一つとして前述の「音韻法則に例外なし」という青年文法家たちの主張にたいする批判が存したと考えられる。つまりいかなる時期のいかなる言語共同体のなかにも、話す個人と同じ数の方言があり、それぞれ特有の歴史的發達を示したという考えである。これをフランス語方言の実証的調査に実施したのがジリエロンとエドモンであった。⁹⁾ 英国においては1873年に英国方言学会がケンブリッジに組織され、ライトがその編集主幹となって、約15年間に収集された方言資料によって「英国方言辞典」(1896-1905)を編集出版した。それは現在用いられている方言、過去200年間に用いられたことが知られているすべての英国方言を収録し解説している。

IV

前世紀の言語研究がもたらした成果は、言語は変化すること、言語は本来ことばであるということ、そして言語には多様性があるということの認識に立った真に科学的な研究

であった。このほかに、言語のいろいろの事象に関するほう大な資料が蓄積され、この資料を収集し分類する方法が洗練されたことをマクミランは指摘している。¹⁰⁾ 英語にかぎらず近代欧州諸国語ことにドイツ、フランス、オランダ、イタリー等におけるそれぞれの国語をすべて収録する巨大な辞書の共同編集がこれを示している。これとともに19世紀後半以後に、印欧諸語以外の、それまでに文字によって記録されたことのない南北アメリカのインディアンの土語その他の言語が、宣教師や学者によって収録され記述されたことは注目してよい。

アメリカの言語学はまず19世紀後半から、パウエルやブリントンやガチェット¹¹⁾等によるアメリカ・インディアン語の共時的な言語分析によってはじめられた。多くのアメリカ・インディアン語のテキストとその文法的分析は「アメリカ・インディアン語提要」(1911)¹²⁾に収められている。ポーアスはその序文のなかで、それぞれの土語はそれぞれの構造的特色や独特の音声・形態・意味を有し、従来の印欧諸語の言語構造についての知識によっては説明できない多くの特質のあることを実証している。かれに続くサビア、スワデッシー、ブルームフィールド、ハース、ホイヤー等によってアメリカ・インディアン語に関する人類学的言語研究はすすめられてきた。

言語研究に記述的方法を用いることの重要性はすでにサビアの「言語」(1921)によって暗示され、ことに「言語の音声」に関する第3章は音韻の機能と分布に関する構造主義的見解を教えている。サビアの音声の類型に関する論文の意図は、(1)同じ音的差異も言語が異なれば異なった構造的価値を有すること、(2)言語習慣は言語の個々の事項に関する習慣ではなくて、構造型のなかで機能する単位としての対立する項目に関する習慣であることを論証することにあつた。¹³⁾そしてブルームフィールドの「言語の科学のための公準集」(1926)と「言語」(1933)によって、心理主義的言語観は排除され、言語についての機械主義的見解とくに共時論的な言語記述に関する具体的な手順が示された。ブルームフィールドの言語研究へのもっとも大きな貢献は、ブロックが指摘しているように、「言語学を科学とした」点にあつた。¹⁴⁾かれはあらゆる前科学的方法を拒否し、言語について記述する場合は観察できない要素に暗に依存するような術語は使用しなかったのである。

アメリカの言語学は、その発達の初期の事情から見れば、人類学的色彩が強かったのは当然のことであつた。この方面の開拓者であるポーアスは、言語学者というよりもむしろ人類学者であつた。サビアとブルームフィールドは、前世紀に発達した印欧語の史的比較的研究に通じた学者であるとともに、インディアン語の研究家であつたことは、その後のアメリカ言語学の発達により広汎な言語学的視野を与えた点で幸なことであつた。アメリカの記述言語学が、まず言語の音声形式を中心に考察し、この音声的資料を要素に分割し類型に分け、

一定の順序に配列することからその構成形式をさがす方向に向かったのはいうまでもない。かれらは実際に観察できる資料に基づくよりほかにインディアン語の分析をすすめる方法はなかったからである。したがって音素論、形態論、形態音韻論、統語構造論へという風に、部分から全体へ、要素から構造へと進むのが研究の順序であり、またこの段階に応じて次第に多くの研究成果を挙げてきた。従来の言語学ないし文法が「項目中心的」(item-centered)であったのにたいし、ことに接続や直接構成要素の分析などにおいては「構造中心的」(structure-centered)視点が重要視されるにいたった。短母音音素の総合型の目録設定に見られるように、言語学的記述は簡潔と完全と優雅とを目指している。そして分析の方法は厳密であり、音声学と音素論を峻別するように、各研究分野や言語学的レベルを混同することを戒める。言語的単位のと立、対照、分布やその現われる環境が考察の中心的課題となるのも構造主義言語学の特色であるといえよう。

われわれは構造言語学の言語観については、つぎのブロックの定義によってその結論的見方を知ることができよう。「言語とはある社会集団がそれを用いて協力する恣意的な音声記号の体系である」¹⁵⁾ まず言語が「音声記号」(vocal symbols)であることは、書かれた文字や身振り、動物の発する騒音、モールズ記号等は言語でないとしてこれを除外する。その記号が「恣意的」(arbitrary)であることは、寒暖計の目盛りと温度とのあいだに見られるような必然的関係がなく、記号そのものとそれが指示する対象との関係はそれぞれの社会の成員の習慣や約束によって定まっていることを意味する。言語が「体系」(system)をなしていることは、¹⁶⁾ ある環境の「同じもの」に対応する音声の「同じもの」が繰返し現われ、これらは一定の大きさに分割されたり、大きな部類にまとめられ、そのあいだに一定の関係が認められることを示す。そして言語は人間の文化的事象の体系的な配列の一つであるという観点から、社会組織、宗教、法律等とならぶものである。

要するにアメリカの構造言語学は言語の「科学的」研究を目指し、その方法は帰納的であり客観的であり試験的であり体系的である。それは報告することのできる事実と方法と原理とに関与する。それは観察や仮設や実験や推論により実際の研究作業にしたがう。¹⁷⁾ このようにして得られた結果は、ことはによるか数学的記号によって記述することができねばならない。このような意味の言語学には心理学や非言語的文化現象の記述は普通ふくまれない。人間の言語活動と文化一般との関係を扱う部門は、「後段言語学」(metalinguistics)として狭義の言語学(microlinguistics)から除外される。

最近十数年間にアメリカ言語学の新しい分野が新しい原理の導入によって開発されてきた。そのなかで言語心理学、機械翻訳、ことに数学的言語学と総称される言語年代学と変形分析文法の画期的な理論は現在アメリカの言語学会でもっとも注目され、また論議の中心となっている。

「変形文法」(transformational grammar)という名でよばれる言語分析と言語理論の研究は、これまでの伝統文法でいう個々の「文」(sentence)よりさらに大きい言語単位である「説話」(discourse)を取扱い試みから起ったと見てよい。ハリスは「説話分析論」¹⁸⁾(1952)において、一つの説話のなかのいくつかの文の「分布分析」は、その文の限界をこえたある種の関係について決定的な結果を示すということを明らかにした。それはテキスト(資料)の構造の研究であり、文より大きいことばの単位である説話の構造分析には従来の言語理論が不十分であることを見出し、それを克服するために一般言語理論を再吟味し、言語記述のためのいろいろの方法に内在する抽象的体系に注目したのである。文法的「変形」を規定する操作は、文と文とのあいだに存する相互関係を調べる有力な手段となった。ハリスの変形文法の理論は、ある言語のなかのすべての文は「中核文」(kernel sentence)であるかこれから展開された「変形文」(transformed sentence)のいずれかであるという仮定に立っている。

このような説話を「分解し」(decompose)て基本的ないくつかの文を見出すということのほか、ある言語の新しい文を「生み出す」(generate)という考えがある。そのもっとも初期の言及はホケットの「文法記述の二つのモデル」¹⁹⁾(1954)なる論文のなかのつぎのことばであろう。文法を試めす有意義な基本的テストとして、それは「分析者によって前もって考察された発話以上にあるいはこれを超えて、その言語のなかの発話、新しい発話をいくつでも生み出す………」ことを挙げている。

われわれは変形文法理論の明確な規定をチョムスキーのつぎの定義のなかに見出すことができる。「Lなる言語の言語分析における基本的目標は、Lの文をなす文法的連鎖をLの文をなさない非文法的連鎖より区別して、その文法的連鎖の構造を研究することである」。そして「Lの文法は、かくしてLの文法的連鎖をすべて生み出し、一方非文法的なものは一つも生み出さないころの装置といえよう」²⁰⁾(1957)。

従来の構造言語学の手順が、音素論、形態論、統語論という風に、要素構成的にすすむのにたいして、いわゆる「生成文法」(generative grammar)は文もしくは説話の分析から逆に小さい言語要素へと下っていくと見てよい。そしてこの理論を支持する学者は、「言語

は有限な長さをもち、有限な一連の要素から成る文の集まりである」という、言語にたいする数学的理解と数理的アプローチを基本的なものと考えている。そして研究の対象には、資料として扱われる具体的な自然言語のみならず、生成される可能的な文の文法性についても問題にするのである。従来の言語学は、発話が構成されている要素を規定し、その結合関係を調べ目録を作成するという分類学的方法にとらわれ、構造記述をとものう発話を生み出す言語の規則を重視しないうらみがあった。「生成文法」の研究は、もともと母国語話者が無限の新しい文を生み出す能力を説明しようとする試みへの関心から起った。それは、それぞれの自然言語の資料の忠実な分析よりも一般言語理論の開発を目指し、言語要素の分類や分布の調査よりもその奥にひそむ言語の規則を発見し、すべての言語に内在する普遍的法則を捉えようとするもののようである。

注釈

- 1) Sir William Jones, Asiatick Researches (1788), I. 422 f.
- 2) Jacob Grimm, Deutsche Grammatik (1819, 1822) ではじめて明らかにされた子音推移の法則で、普通「グリムの法則」と称される。ギリシャ語 *patēr*, ラテン語 *pater* の [p] が、英語 *father* の [f] となっているのはその一例である。この現象にはラスク (1818) も気づいていた。
- 3) J. Waterman, Perspectives in Linguistics (Chicago, 1963), p. 16.
- 4) Karl Verner, “Eine Ausnahme der ersten Lautverschiebung,” Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung auf dem Gebiete der indogermanischen Sprachen, XXIII. 97 – 130. この論文が近代言語学発達の第2の頂点をなすという見解は C. C. Fries, “Advances in Linguistics,” (1961) College English 25. と C. F. Hockett, “Sound Change” (1965), Language 41. 2. 参照。
- 5) “Die Ausnahmslosigkeit der lautgesetze.” — August Leskien.
- 6) Hermann Paul, Prinzipien der Sprachgeschichte (1880). H. A. Strong (transl.), (1889), p. 433.
- 7) Ibid., p. 21.
- 8) Cf. J. R. Firth, “The Word Phoneme.” Papers in Linguistics, 1934 – 1951 (Oxford Up., 1957), pp. 1 – 2. Courtenay の音韻についての概念 (1901), つまり過渡的な「わたり」をともなった一つ一つの音声を研究する学問を「人身音声学」(Anthropophonetics) あるいは「生理音声学」(Physiophonetics) とし、音韻を研究する学問を「心理音声学」(Psychophonetics) と呼んで区別した。この考えはかれの弟子 Kruszewski, Über die Lautabwechslung (1881) に負うという。
- 9) J. Gilliéron & E. Edmont, Atlas linguistique de la France (1902 – 10).
- 10) James B. McMillan, “Summary of Nineteenth – Century Historical and Comparative Linguistics,” (1954. Readings in Applied English Linguistics), pp. 31 f.
- 11) Major J. Powell, D. C. Brinton, Albert S. Gatschet — Cf. Robert

- A. Hall Jr., "American Linguistics 1925 - 1950," (Archivum Linguisticum vols. Ⅷ, Ⅷ.) pp. 67 f.
- 12) Franz Boas (ed.), Handbook of American Indian Languages (Vols. I and 2, Washington, Smithsonian Institution, 1911)。
- 13) Chavles C. Fries, Linguistics and Readings (New York, 1962), p. 62.
- 14) Bernard Bloch, "Leonard Bloomfield," Language 25 (1949), p. 92.
- 15) Cf. McMillan, op. cit., p. 32. なお B. Bloch & G. L. Trager, Outline of Linguistic Analysis (Baltimore, 1942), 1942, pp. 5 - 7. を参照。
- 16) これに関しては二つの観方がある。"God's Truth" 言語学者は、言語には研究者が分析するのを待っている体系がすでに存し、これを発見すればよいとするのにたいし、
"Hocus-pocus" 言語学者は、体系を一定の仮定からある手順によって組立てた虚構であると見なす。Cf. Householder, Review of Harris's Methods in Structural Linguistics. (IJAL Vol. 18, pp. 260 - 8.)
- 17) Cf. McMillan, op. cit., p. 32.
- 18) Zellig S. Harris, "Discourse analysis" (1952). Lang. 28. 1: 1 - 30.
"Discourse analysis : a sample text." (1952). Lang. 28. 4: 4 74 - 94.
- 19) Charles F. Hockett, "Two Models of Grammatical Description," Word 10 (1954).
- 20) Noam Chomsky, Syntactic Structures (Mouton & co., 1957) p. 13.

ADVANCES IN AMERICAN LINGUISTICS
--Their Background and Directions--

Tetsuro Hayashi

A comparative and historical study of Indo-European languages was initiated and developed toward the beginning of the 19th century by Jones, Bopp, Rask, and Grimm, who believed that "Language changes," or "Language has history." Deutsches Wörterbuch and The Oxford English Dictionary were two of the greatest historical dictionaries ever to be compiled.

The second period (1875-1925) of the development of modern linguistics is marked by the severe phonological method and structural principle of the Jung-Grammatiker, such as Verner, Leskien, and Paul. That "Language is speech," and "Language has variety" were their view of language, by the principle of which

they came to develop a scientific study of speech-sounds and phonemes and linguistic geography.

It is usually believed that a descriptive study of American Indian languages was first introduced by Boas, a great anthropologist, and his followers, such as Sapir, Swadesh, Hoijer and Haas. Sapir and Bloomfield, both being fully versed in historical linguistics and descriptive linguistics, were the true founders and pioneers of structural linguistics in America. Its method is inductive, objective and systematic; it works by observations, hypotheses, experiments and inferences. The structuralists suppose that "Language is structured" and "Language has functions."

From 1950 on, psycholinguistics and machine-translation and such mathematical linguistics as glottochronology and generative grammars were developed as promising disciplines. The last mentioned field was initiated and cultivated by Harris and Chomsky, and it seems to aim at accounting for the ability of a native speaker to produce a number of new sentences, and to explain a universal linguistic theory underlying natural languages.